

法眼

第4号 1999年6月

「友が私を完成してくれる」

(3)

北アメリカ開教総監
秋葉玄吾

前回に引き続き、柳田聖山氏の「祖堂集ものがたり」から道悟と雲巖のエピソードを紹介してまいります。

前回に、瀧山のところへ行こうとした雲巖が、道悟の導きで、再び薬山に帰った後の、二人の物語です。「祖堂集」第十六、「南泉の章」にあります。

道悟は雲巖とともに、南泉のもとにやって来た。南泉は道悟にたずねて言う。

「君の名は何と言う。」

「円智(完全な悟り)です。」(道悟の名は円智道悟である)

「智の及ばぬ境地はどうだ。」

「それを説明することはタブーです。」

「全くはつきりしたものだ。それを説明すれば頭に角が生えるからね。」

それから四・五日ほど後、道悟は雲巖と一緒に、僧堂の前で衣の繕い物をしていた。南泉はちょうど、散歩に出かけようとして、道悟を見つけると、前のときと同じようにたずねた。

「智上座は、先日言われたな。〈智の及ばぬ境地について、説明することはタブーである、それを説明すれば頭に角が生えるから〉と。現在は、いったいどのように実行しているか。」道悟はむっくりと立ち上がると、退いて僧堂の中に入り、南泉が行ってしまうのを待ち、ふたたび出て来た。雲巖は道悟にたずねた。

「先生がさきほど君にお尋ねになったのに、どうしてお答えせぬのです。」

「師兄はそこまで、利発でいらっしゃる。」

雲巖は、やがて、南泉和尚のところに向ってたずねた。

「さきほど、先生が私の師弟子の円智におたずねになられた。

あの話に、いったいどうお答えすればよろしいのか。」

「彼はなかなかもって、畜生の仲間に入れる人だ。」

「どういうのが、畜生の世界ですか。」

「ほら君は先日聞いただろう、〈智の及ばぬ境地について、説明することはタブーである、それを説明すれば頭に角が生える〉と。"それ"をそのまま真理と名づけたら、もうすでに本

物ではない。直接、畜生の道を行かなくてはならぬ。」雲巖はやはり、一を聞いて十を知るほど、すばしこい男ではなかった。

このパラグラフは有名は「異類中行」の公案や、「曹洞五位」の原点の話である。

当時南泉は、人々に「畜生の仲間に入れ」とすすめていたことはよく知られている。それは、東にロバとなり、西に馬となって、ひたすら分別を捨て、悟りを超えて、潜行密用せよという意味である。

「潜行密用」とは、仏法を心得るのではなく、ひたすら仏法を行ずることである。それは維摩がかつて「仏道とはく非道>(罪の扱いを受ける迷いの世界のこと)へ行くことである」と言ったことの、すぐれた展開である。南泉の場合、それがさらに日常的な行動になりきっていることに注意すべきである。実際、南泉の法堂での説法は、常にそうしたものであったようだ。たとえば、「祖堂集」第十六・南泉の章のはじめに次のような話がある。

師は、説法の席にのぼると、常にこう言った。

「このごろは、禅の専門家がはなはだ多すぎて、一人の痴鈍者(価値意識のふっきれた人)を探すことも難しい。君たち、考え違いをしてはいけないよ。この大事を身につけたいなら、かならず仏がまだこの世に出る前の、およそ有り難そうな名称もない「ところ」で、こっそりと働き、ひそかに「そのところ」に通じ、誰にも気づかれぬようにすることだ。そんな時点での体験こそ、少しばかり手応えがあろうというものだ。『祖師も仏も実在を御存知ないが、山猫や野牛の方がちゃんと心得ている』と。それは何故か？彼らには余分な分別がないからだ。それで、ありのままの真理とよんでも、すでにもう本物でなくなる。ただもう動物の仲間に入らねばならぬ。」

この説法の言葉は、やがて黄檗に引き継がれる。黄檗は「大唐国に禅師なし」という有名な言葉を吐く。

—これからは別の話になる—

こうした南泉の説法を聞いて、道悟はすぐにそれを自分のものとしたが、雲巖は容易に理解出来なかった。雲巖はあまりにも伶俐すぎて、痴鈍底でなかった。彼はかつて兄の道悟から二人がともに肉体を捨ててしまったとき、つまり来世でどうなるかと問われて、不生不滅のところでおおうと答えた

人だ。薬山より生死について問われ、彼は「目前に生死なし」と答えている。それは確かに、薬山が言うように、二十年も百丈の侍者をつとめながら、俗気の抜け切らぬ答えであった。

あまりにも先を見通してしまう俊発の才気は、とかく観念に墮しやすい。

いずれにしても、南泉の言う意味をくむことの出来ない雲巖の様子を見て、道吾は師兄を伴って、ふたたび薬山のところに帰る。

もともと、彼らが揃って南泉をたずねたのは、何とかして雲巖に眼を開かせようという、道吾の親切によるものであった。

- 先程の параグラフの続きである。

道吾は心の中で思った。

「彼はやはり薬山に縁があるらしい。」

彼らは、ただちに薬山に引き返した。

薬山がたずねる。

「君たち、どこに行っていたのだ。」

雲巖、「このたびは南泉のところに行ってまいりました。」

薬山、「南泉はこのごろ、どんな方法で学生たちを指導しているのか。」

雲巖は前の話を告げた。薬山は言った。

「君はいったい彼の言う「畜生の道」がわかっているのか」

雲巖、「わたくしは、あちらに居りましたけれども、ただもう、南泉の手段がつかめませんので、それでわざわざ帰って参りました。」

薬山は大笑いする。雲巖はすぐにたずねる。

「どういうことが、畜生の仲間に入ることなのですか。」

「ワシは今、疲れている。君もしばらく退がって、あとでやって来なさい。」

「私は、わざわざこの問題のために帰って参りました。どうか先生、お願いいたします。」

「君はまあ退がってくれ。わしは今日、肩がいたむ。他の時にしてくれ。」

雲巖は礼拝したのち、すぐに出てゆく。道吾は薬山の室の外で立ち聞きをしていて、雲巖が薬山の意図も理解せず、何もつかめず、何も気付いていないのを、目の当たりに見て、思わず舌をかんで血を流した。しばらくして、道吾は雲巖のところに行った。

「師兄が先ほど先生のところに行って、あの話をたずねた時、先生は何と言われた。」

「先生は何も私のために教えて下さいませんでした。」

道吾は雲巖のこの言葉を聞き、低く頭をたれ、声を出すことも出来なかった。

この後、二人は別の場所で、それぞれ住持となった。

道吾はやがて死の時に及び、雲巖の弟子の洞山と僧密がやって来るのを見た。道吾は特に僧密に伝えた。

「君の先生の雲巖は、この一件の問題に気付いていない。わ

たしはかつて共に薬山にいたとき、彼にそのことを、教えなかったことを残念に思っている。しかし、かれは薬山の子であることに、まちがいない。」

道吾はさらに僧密に、事細かにこの事件を伝えたのである。

以上が、「祖堂集」巻十六「南泉の章」に伝える、道吾と雲巖の後日物語の paraグラフです。この話は、薬山、雲巖、洞山、と至る系統の人々の主張を知る上で、大変重要な内容を含んでいます。「潜行密用」「曹洞五位」の主張の背景をかすかにうかがうことが出来ます。

もうひとつ、雲巖は生涯、いわゆる大悟の経験をもたなかった、ということがこの paraグラフによって知ることが出来ます。これは大変重要なことです。彼が薬山の法嗣であったことは、法弟の道吾が死に臨んで、初めて雲巖の弟子に明かしたのです。それは、かつて、薬山が雲巖を評して、道吾に語った言葉、「彼は道の眼というものはちゃんと持っているのだが、ただ淘汰（鍛錬）を欠いているだけだ。」ということに基づいています。

道吾は雲巖のため、「われを生んだのは父母、私を完成してくれるものは親友である」と語った薬山の言葉を、生涯守ったと言えましょう。これが曹洞系の家風なのです。

次のような言葉があります。

「その見解（仏法の理解度）が師と斉しいときは、師の徳を減じ、その見解が師よりすぐれて、はじめて師の徳を全うすることになる。」

この言葉は、百丈禅師が黄檗をほめたときのものです。やがて、黄檗・臨済とつづく人々のあいだで、この系統の禅の特色を示す言葉となっています。

これらの二つの言葉は、いかにも、馬祖にはじまる大機大用の家風と、石頭・薬山より雲巖・洞山とつづく、系統の綿々密密の家風との、見事な対比を示しているように思われます。

思わず紙幅をはるかに超えてしまいました。また次回に道吾と雲巖のエピソードを「祖堂集」の中に追って行きたいと思えます。

最後になりましたが、一言付け加えさせていただきます。この五月二十二日、二十三日と、LA禅センターの山の陽光寺で North American Soto Zen Conference を開催いたします。

この千年以上の曹洞の禅の流れが、今アメリカの地に流れています。この流の仲間達は現代の世界に生きています。千年以上も昔より、はるかに活発に交流が出来る状況にめぐまれています。私達は彼らに恥じぬよう、個別のグループの意識を捨て、互いに尊重しあい、大きな曹洞の大河を形成していく努力を嵩ねるべきであると、私は考えます。

より多くの方が、この会合に参加し、アメリカの曹洞宗を、いかに創りあげていくか、遠慮のない議論を展開していただけますよう、皆様に呼びかけたいと思えます。

素晴らしいゲストをむかえて

ソルトレイク市観世音禅センター臘八接心

観世音禅センター
玄法・マーゼル

1998年の臘八接心は、さいわいにロスアンゼルスから、北アメリカ開教総監の秋葉玄吾師をはじめ全米各地の禅センターから多くの指導者をゲストとして迎えることができた。開教センター所長奥村正博師、サンタ・クルーズ禅センター主任教師キャサリン・タナス師、アイオワ・シテイ禅センター主任教師瑞光・レディング師、サンフランシスコ禅センターほうかい・テイア・ストローザ師である。これら諸師によって、この度の接心に参加した人々はおおいに裨益される場所があった。

諸師が観世音禅センターにおける修行にたいして尊敬と慈愛をもって接していただいたことを有り難く感じた。我々はまだ新しいセンターなので、特に伝統的な法式に関して学ぶべきことがたくさんある。我々の修行者にとって、今度の臘八接心のゲストのようによく訓練された修行を体現している素晴らしい見本を見る機会を持つことは大変有益である。

様々な法系、各地の道場からの修行者が集まって今度のように修行を共にするとき、我々が持つ差異を乗り越え、そして和合の精神で修行することを促進させる。

この臘八接心に記録的な参加者があったことも驚きではない。禅堂は五十人以上の参禅者、指導者、そしてゲストでいつも溢れていた。

今年の臘八接心のテーマは法の相続ということであった。これは、観世音禅センターの古参の僧侶のうち五人が、嗣法の重要な部分である伝戒（結脈と戒律）を受ける過程にあることを考えれば、自然な焦点であった。

我々のゲストには各々このテーマにそって法話をしていただいた。各々の法話は西洋における曹洞禅の修行の様々な異なった側面を際立たせることになった。ゲストの中には鈴木老師の法系の人も、片桐老師の系統を代表する人もいた。各師の多彩な禅修行の経験について聞くことは興味深くそして励ましになった。私は各師のそれぞれの師匠に対する真摯な感謝の念の表明と永年の、長時間にわたる坐禅修行に対する献身についてはなしを聞いて感銘を受けた。秋葉師や数人のゲストの指導者の方々は親切にも、当禅センターの参禅者に代参（一対一の面談）をしていただいた。

観世音禅センターの教師である私と天桂・コッペン師は前角老師の法系に属するので、この臘八接心の参加者は、西洋において活発に活動している主要な三つの法系の人々から指導を受けるという稀な機会に恵まれることができた。

接心の六日目の晩、秋葉師には、教授師として伝戒の儀式のお手伝いをいただいた。この荘厳な儀式における師の存在と御支援に、先になっきた温かいそして楽しい御法話とともに深く感謝をした。

伝戒の式があった次の日の晩には五人の新しい僧侶が得度を受けた。接心はその次の日におこなわれた首座法戦式（第一座の法話と問答）を最後として円成した。それは、秋安居（三ヶ月の修行期間）の解制の日でもあった。

1998年の臘八接心参加者は、長くこの盛り沢山の内容があった一週間を記憶にとどめるであろう。

デニス・玄法・マーゼル老師は、1972年にロス・アンゼルス・禅センターにおいて、禅の修行をはじめた。1973年、前角老師について受戒、得度。1979年、法師のタイトルを授与され、1980年嗣法。1981年、前角老師に同行して日本に行き、瑞世禅堂。その寺、法真寺はユタ州ソルト・レイク市に所在し観世音サンガという名前の国際的な修行者の共同体の参禅道場となっている。観世音サンガは1984年に創立されアメリカ合衆国およびヨーロッパに1000名以上の会員を持つ。玄法老師には、キャサリン・ゲンノー・ページス、故ジョン・ショードー・フラット、そしてアントン・テンケイ・コッペンの三人の嗣法の弟子がある。著書に*The Eye Never Sleep* (1991, Shambhala 社刊)と*Beyond Sanity and Madness* (1994, Charles E. Tuttle社刊)がある。

D

34



辨道：1998年タサハラ接心

シャスタ・アベイ
エコー・リトル

私がはじめてタサハラについて読んだのは1970年、「Moving On」という誌名の定期刊行雑誌に目を通していた時だった。私が禅に興味を持ちはじめたばかりの頃であった。それ以来、タサハラは、タサハラ禅マウンテン・モナステリイとして発展し、アメリカの禅仏教についての本や会話にはいつでも話題にされるところとなった。残念なことに私には昨年の秋までタサハラを訪れる機会がなかった。尼堂頭の全慶ハートマン師より接心のゲスト講師にと御親切な招待をいただいて、ついにタサハラを訪問し、それまで沢山のことを聞いていた共同体の修行生活に直接参加する機会をえたのである。

明らかに、タサハラは美しいところである。同道場の立地条件と自然環境が安らぎ、瞑想そして静かな調和を感じさせる。しかし修行道場としてはそのような快適な雰囲気以上のものがなければならない。遠くから仏教の道場を訪れる人々は、その道場が成功しているかどうかを判断するもっとも大切なポイントは、仏様の教えにほんとうに帰依しているか、その場所の修行者がどのように教えを理解しそして実践しているか、そして仏道修行の目的にそってどのように共同体として和合した生活をおくっているかということにかかっていることを知っている。私の滞在中の見聞で、安居者達が、たぐいまれな真摯さで仏道修行に献身していることに強い印象を受けた。多くの初めて禅に志す人々と同じように、修行をはじめたばかりの頃、私にとって接心は魅力的な、しかし骨の折れる経験であった。

永年の間に、私はその接心の困難さと接心が生み出すダイナミックな緊張感を味わいそして楽しむことを学んだ。そして私はこの度の接心の中に、タサハラの修行共同体の人々の、接心を円成させるための動的な活動とよくバランスがとれている静けさから裨益されそしてそれを味わうことができた。尼堂頭老師、ディレクター、役寮の人々、そして一般の修行者の人々は、我々この道場の習慣やエチケットに不馴れなものにとっても親切で、温かく、そして必要な時には何でも助けていただいた。皆さんにはまた、我々が何か必要なものを忘れた時や、いつどこに集合するのか分からなかった時などに、慈愛を持って助けていただいた。我々外来者が最悪のときに迷惑なことを頼まなければならなかった時にも優しく、寛大に対応していただいた。

その道場で行われている修行の質については、道場の骨組みである、各々の修行者達の役割、道場の組織、境内そして訪問者や修行者相互に対する思いやりや行き届いた気

配りがあるかないかだけを見てもハッキリ見分けることができる。修行者の人々は静かにそして黙想的に日常の役割を遂行していた。それぞれの建物やその他の施設の位置またそれらの使われ方がその共同体の理想を維持していくのに貢献している。明らかに、安居者の人たちはこの境内の土地を愛しよく世話をしている。掃除が行き届きどこもよく整頓され清潔である。宿泊施設は上品でかつ質素なものであった。我々のカテゴリーは簡素で居心地が良かったが、しかし不放逸を許さない、自己抑制と瞑想に適したものであった。接心中は素晴らしい天気にも恵まれたが、冬期や春先にこれらのコテージに住むのは楽ではないと推測された。それでも人々は明らかにそうしているのだ。その生活を意味のあるものにするために、修行者は信仰と決意を持って、非常に質素な生活を送らなければならない。これらの要素が、修行者が坐禅に焦点を絞り、仏道修行を深めていくことを助けるバランスのとれた機会を生み出すのに寄与している。もうひとつ、驚きそして強く印象に残ったのは、出会ったり、すれ違う時にお互いに合掌をすることを実行していることであった。これは東洋では一般的なことだがアメリカではあまり見かけることはない。安居者の人たちが、何をしている時にも、出会う時にはいつでも立ち止まり、合掌し、低頭して、そしてまた歩き始めるのを見るのは本当に喜ばしいことだった。これは心が今の瞬間に固着している対象を手放しそして歩行を坐禅にすることを助ける素晴らしい行である。このように低頭することは、ひいては、我々がこの瞬間にしていることにおいて、瞑想が最重要なものであることを思い出させ、また他の人々を、仏性の在り処（寺）として尊敬する気持ちを育むこととなる。合掌低頭、礼拝が行じつづけられる限り、仏法は相続されていく。

接心の差定は、伝統的に、極端には走らないにしても厳しいものである。朝3時45分に起床したあと、朝の勤行までに2注の坐禅がある。朝課には伝統的な曹洞宗のお経とともに、一つか二つ伝統的ではない英語での読経があったが、それはその場に相応しくそして感銘的であった。接心が終わるとともにそれを止めてしまうのが残念であったことを告白する。私は英語だけでの読経になれているので、般若心経や大悲心陀羅尼を日本語で読む毎日の読経に対してのあやふやな記憶と貧しい技術を蘇らせることは楽しい努力であった。経本を与えられて、それをみながら読誦できたので、余り疎外感を感じないでおれたことに大変感謝している。朝課に引き続いて、禅堂での法式どうりの朝食があった。食事は三食ともに禅堂において行われた。食事の作法は赴粥飯法に基づいて行われ、お給仕も型どうりに行われた。料理が素晴らしいものであったことはいまでもない。

尼堂頭の全慶・ランチ・ハートマン師は、素晴らしい、活力に満ちた指導者で慈愛と規律との適宜なバランスと、その限界とを良く理解しておられる。最初の日にされ

た提唱を除いては安居者の人たちに余り多くのことは言われなかった。しかし、御自身の弁道のされかたが良いお手本であった。そして御自分で作られた差定にしたがって接心が進行していくのを見守っておられた。しかし、何かを話される時は、率直であり、その場の状況に相応しいものであり、慈愛と励ましに満ちたものであった。師の訓戒は感銘的なものであり、私は今まで行ってきた努力をよりいっそう強固なものにしなければと感じた。ある時、師はわたしの中に今でも残っている、深く説得力のある話をされた。「全身で、全集中で、全存在で、骨の髄から仏道を修行しなさい、それが弁道です。」まことに強く心に訴える、素晴らしい教えである。

全部で七人の、多数のゲスト講師を迎えての接心に参加するのは今回が初めてであった。私はそれを楽しんだ。それは我々一人一人にとって、それぞれの発言を通じて個性、差異を認めあう素晴らしい機会であった。それぞれの提唱はその教えの表現の仕方において独自であり異なっていたが、しかしそれぞれが全く同じ教えなのだというのを申し分なく伝えていた。それぞれの発言者が个性的に、しかし坐禅修行と仏道への献身に対する決意については全く同じなのだという事を表明された。接心のテキストとしてつかわれた奥村正博師翻訳による、道元禅師の「弁道話」が七人の発言者によって七とうりのちがった角度から吟味され、説明された。このようにして、多面体である仏法と言う宝石が、ひとり一人の発言者の目と教えと行動をどうしてそれ自身を示したものである。たとえ我々が我々にとって最も単刀直入で、受け入れやすい仕方でも仏法を開示する素晴らしい師匠について学べる有り難い機縁を得ていたとしても、このような接心は、異なった国民的、文化的背景、そして修行経験を持ち、より大きな修行者のグループに対して色々な意味で有用な、それぞれ独自の仏道修行に対する見方をもっている、男性と女性の指導者から仏法を聞くことができるという貴重な機会を提供してくれる。この接心は、私自身の師匠の教えをより深く理解しなおす助けになり、そして又私に坐禅と仏教の修行の様々な面についての新鮮な、そして今まで深く考えてきたことのない見方を教えてくれた。沢山のことを学ぶ機会があり、多くの恩恵を与えられた。道元禅師が教えられたように、真実を学ぶのに二つのやり方がある。一つは師匠について聞法すること、もう一つは坐禅修行である。この二つが適宜に混じりあっているのが良い。我々この度の接心に参加したものはこれらの両方から学ぶ機会に恵まれたのである。

いつもの接心のように、必要な時にしか会話はしなかった、ほとんどの時間を坐禅堂で過ごした。私は接心が始まる前の日に到着し、終わった日に帰らなければならなかった。だからタサハラを共同体を養い、道場を維持していくために必要な作務の活動については余り学ぶことができなかった。しかし、私は、他の人々と一緒に十分にその活動

に参加しているように感じた。毎日行われている「ワークサークル」(全員が輪になって、その日の仕事の打ち合わせをする)は本当に楽しかった。鐘と作務太鼓が鳴り響いた後、みんなが輪になって、施設の掃除や整備、維持などの仕事の配分をするのである。このような禅寺や道場の日常的な活動が、仏教のサンガの目的である和合を現成させている。八十人の人々が自主的にお互いの助けになるように、個人的な所得や利益の追求と言う動機はなしに、すべての人々のためにしなければならないことを、静けさと、落ち着きと調和を保ちながら遂行するために集まっている。今日の世界の為になんと素晴らしい教訓であり、モデルではないか！

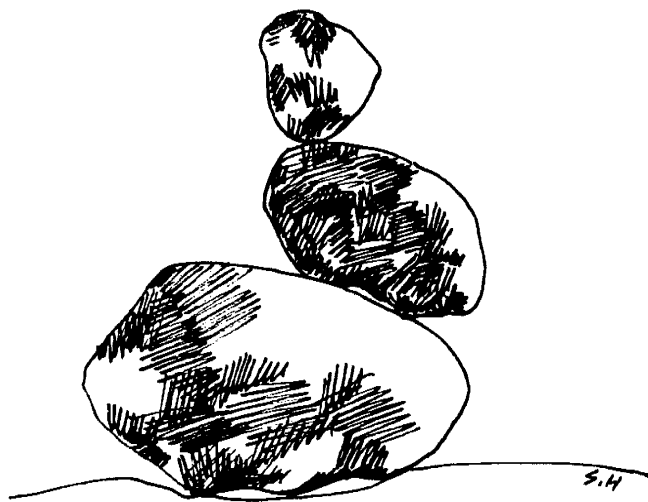
タサハラの人々はこの接心をうまくオーガナイズされたので、すべての活動が申し分なく運んだ。接心が始まる前の晩には、みんなが禅堂に集まって、伝統的な接心の心得についての教示があった。この一週間にわたる修行の目的を明らかに示し、我々一人一人が、そして集まった人々全体として、どのようにすればこの接心をみんなにとって意義のあるものにすることができるかという心掛けが説かれたのである。梵鐘や、馨子や太鼓などの鳴らし物は、心を込めて、そして正確にならされた。法式や作法は常に乱れなくなされた。拳経もそうであった。毎日、昼食の前には、「弁道話」の一分である「自受用三昧」を誦した。この接心に参加するまで何年ものあいだ「辨道話」を詳しく勉強したことはなかったが、私はこの「自受用三昧」が覚えやすく、そして我々をいきいきとさせるものであることが分かった。この接心中、道元禅師の「自受用三昧」を誦し、また「辨道話」を読んで参究することをくみ合わせることによって、まことに私の、この素晴らしい著作に対する、また人間として弁道ができる機会を与えられていることに対する、感謝と味わいは深められ、かつ広められた。

接心の最終日、全慶師と参加者全員は、鈴木老師と片桐老師のお墓に御参りをした。その墓石は、タサハラを流れる溪流の水音が遠くからこだまし、山の色が美しく見える山際の森の中の空き地にたてられていた。私は特に、私の師匠も含めて、集まった講師みんなの師匠の為に回向していただいた全慶師の御心遣いに感動した。タサハラ道場の御開山のお墓に水を注いだ時、我々、禅の修行者の第一世代として、禅仏教をこの国にもたらした師僧方や、在家の方々に對する、また仏祖の道を一心に修行する努力の中で我々全員が経験してきた試練と艱難に対する感謝の念がどれほど深いものであるかを思い返した。

禅の道場に住むか、禅寺で長期間過ごした人でないと接心を日常の中の、自然なライフスタイルとして、もしくは決まった日課として経験するひとはいないのがふつうである。しかし、接心は日常生活のかかわりや混乱をひとまずおいて、坐禅と仏道修行に専念する素晴らしい機会である。例え、一週間がどんなに短く、飛んでいってしまった

ように感じたとしても、坐禅の心の中に、坐禅の心を通じて、そして坐禅の心から、生きることを学ぶのに十分な時間がある。接心を坐することは、何か威圧され、苦行に見え、もしくはへとへとに疲れるだけのように見えるかも知れないが、一週間、「ただ坐る」という機会をもつことは測りがたい、しかし無視できない、ほんとうの宝物を持つことである。私は、尼堂頭全慶師と安居者の皆さんにタサハラに接心に坐らせていただいたことを深く感謝する。タサハラがユニークな環境なので、その共同体もユニークなものである。その世間と隔絶した、静かなそして美しい自然環境の中で、普通には仏教に興味をもたないであろう幅広い人々に、禅仏教を余すところなく提供することができる。これからも末永く、志しある人に仏道修行の場を提供していただけるように祈る。

エコー・リトル師は、故ジュー・ケネット老師の弟子で、1971年に同老師に得度を受けて曹洞禅の道に入る。同老師について嗣法し、現在シャスタ・アベイの堂頭の職にある。



日本での修行体験

ストーン・クリーク禅堂
慈照・ワーナー

私が愛知専門尼僧堂に初めて安居したのは、5年前の桜の花の季節でした。東京から新幹線に乗り、お昼のお弁当が食べられないほど不安でいっぱいでした。私は、尼僧堂・尼僧の為の修行道場が、日本の修行道場の中でも特に厳しい場所で、彼女達の厳しい修行は有名であると聞いていました。その上、私の日本語力は、勉強しようと努力はしていたのですが、心もとないものでした。また、そこには英語を話せる人もいませんでした。もちろん、心配し始めると何もかもが心配になるものですが。

愛知専門尼僧堂の建物は、りっぱなもので、がっしりと深く根づいたような構造の、伝統的な寺院の造りです。名古屋の富裕な住宅区域の丘の上にある境内に、かたまって建っています。正門から入ると、参道が世話のいきとどいた庭園を通り過ぎ中へ続いています。

到着したその日のうちに、朝課や法要や掃除の中に押し流され、知らない人々の中で、知らない読経や作法を理解しようと一生懸命でした。少しずつ、人々の顔の見分けが付き始め、差定も理解でき始めました。私は、愛知専門尼僧堂の春安居に1年生（新到）として参加しました。僧堂の厳しい階層の中、私は一番下だったのです。1年生は、自分より先輩（古参）の誰からでも、ひんぱんに注意されます。それは、そのつど誰にとっても辛いことですが、ことに、私のように階層の少ない世界から来ている西洋人にとっては辛いことでした。一番下にいるということは、整列の時も一番最後なのですが、利点もありました。皆同じ黒いスリッパを履いているのですが、暗い廊下に並べてある時、私のはいつもひとつだけ一番最後に脱いであるから、いつも速やかに見つけることができました。とはいえ、新到にとって尼僧堂の修行は厳しいもので、そこでの生活は厳格で規則正しく、伝統的です。仕事のグループである寮がこの道場の機能と生活の単位です。各寮の運営は、綿密で協力的です。私は、三時の読経や法要などの行持を行う場所、法堂のお世話をする知殿寮に割り当てられました。各寮では、一つの部屋を数人が共有し、生活も共有するといった感じです。しかし、アメリカ人のアイデアで、だまってついていくだけではだめなのだと言うことにすぐ気がつきました。寮内では、毎日それぞれの人が違った分担を受け持ち、沢山の仕事をこなし、多くを学びます。私が出来ない事は何でも、寮友の誰かが、自分の仕事に加えて私の分までこなさなければならなかったのです。それは、私の任務をなし遂げ、言われた事をきちんと理解しようとする強い動機になりました。一度、輪番制の分担を指示する単牌をどのようにいつ次の寮に回せばいいのかわからなかったとき、私のせいで、私の寮の全員が、新し

い分担に加えて、同じ仕事を二度するはめになってしまいました。

そのようにしっかりと整ったコミュニティでは、どのような失敗をしてもすぐに目立ち、普通かなりはずかしいものです。掃除中須彌壇から後ろ向きに落ちたことがありました。踏み段が固定されていなかったのが分らなかったのです。バケツの水と一緒に私も飛び散ってしまいました。皆さんがすでに食事を済ませているのに、私はまだ応量器をきれいにする為に、たくわんと格闘していたと言うことが何度もありました。何時間も前に指示が出された時に、理解できなかつたので、居なければいけない場所に、居なければいけない時、決められた服装で居なかつたことが数え切れないほどありました。そのような状況になると、自分にとっては苦難の時でしたが、他の人にとってはやっかい者でした。お互いが善意をもっているにもかかわらず、言葉と文化のへだたりは、疑いの余地なく重荷でした。朝から晩まで、外国人修行者は、人の話を理解するために、そして異文化の思考と生活様式を理解し、自分をそれに適合させる為に、全集中力を精一杯働かせる覚悟をしていなければなりません。そして、限らない忍耐を持つ私の仲間達も、同じように、私が彼女達のやり方を知らないのだと言う事実を受け入れ、どうにかして、私に彼女達のやり方を理解させる努力をする覚悟をしなければなりません。私の寮に居られた二人の先輩は、大変親切でした。私にとって幸運でしたが、単なる偶然ではなく、堂頭の青山俊董老師のお心づかいで選んで頂いた寮だったので。次に私が何をすべきか、何回も何回もゆっくりと簡単な日本語で説明して下さいました。私はほとんどの漢字が読めない為、紙にひらがなで書いて下さったこともありました。私が彼女達の余計なお荷物だったことについて全く苦情をいわず、それどころか、何とかして私と一緒に生活を楽しめ、共に笑えるようにして下さいました。一緒に修行させて頂いた尼僧様方のまじめさには、大変深い感銘を受けました。彼女達は、修行の後の報酬を期待してではなく、仏道に献身する為にこの道を選んだ、思慮深く円熟した女性でした。出家する前は、看護婦や母親、事務管理職、そして着物の仕立屋さんだった彼女達が、自分の人生を深い誓願と共に仏道を行じる方向へと転換させたのです。指導者の皆さんは、修行者達が僧侶として生きていく上での準備と、修行を指導することに専心しておられました。青山老師は、修行者達が一心に精進弁道するよう真剣に期待されており、どこまでも力強く修行者の努力を支えておられます。その期待と支えによって、現在の修行環境を確立されたのです。その前提には、うわべだけの塵は殆ど見受けられません。私は以前、外国に旅行したことも、居住したこともありましたが、アメリカの道場で何回も安居をした経験もありましたが、あの安居は、私の人生の中で辛い経験のうちの一つでした。ことに、僧堂修行の真髄である厳格な修行を私自身の身体と心で参究する機

会であったことは、貴重な経験でした。もちろん、日本の修行や法要、その他の行事について、素晴らしい皆さんの詳細を吸収し、3分で法衣を着替える方法も学びました。しかし、数人の修行に打ち込んでいる素晴らしい人達に会えたことは、「厳しい」と言う私の憶測を揺るがしました。私は、最高の努力をしたように感じたことが何度もあり、その努力に対する暖かい反響と容認を感じました。

そして、私のために何と盛大なお別れパーティーをして下さったことか！

4年後、私は秋安居に参加するため、愛知専門尼僧堂に戻りました。私の日本語も少しましになり、私が行く場所も知っていましたから、成田空港からの汽車の中で、心臓がドキドキすることもなく、お弁当も問題なく食べられました。ただ、尼僧堂と自分自身が、どのように変わったかを見ることに大変好奇心をそそられました。

そして、この度は私にとって全く違っていました。私が以前一緒に修行した数名の方が、古参として残っておられました。彼女達と指導者の皆さんが私を覚えておられたこと、そして親切にして下さったことに驚かされました。全く知らず慣れない場所ではありませんし、私はもう1年生（新到）ではありませんでしたから、尼僧堂の機構に自分が前よりも組み込まれているように感じました。私は、修行生活のリズムが前よりもよくわかっていたし、よりスムーズに適應することができました。彼女達は、わざわざ私の為に、私の悪いひざをおぎない、個人的に色々教えて下さいました。私は、朝課導師や両大本山で行う瑞世の進退法を学びました。今回は主に、数名の尼僧堂に長くいる方々が彼女達の世界を私に伝えようと努力して下さったお陰で、いくつもの層がある尼僧堂での修行生活の意味をもう少し深く理解することができ、僧侶の養成における僧堂修行の役割が私にとって明確になりました。名古屋の蒸し暑い晩夏を秋の嵐と台風が吹き飛ばし、外にある堂々たる銀杏の木の色が黄色になり、寒くなり始めたころ、私が指導しているカリフォルニアの小さな禅堂に帰りました。今回私が去るとき、規則正しい共同生活を去ることを残念に思いました。しかし、私は本当に送迎するのではなく、長い暫暇を頂いただけと言うことを互いに認め合いました。できるだけスムーズに再び尼僧堂の修行の流れの中に入っていけるように、もう一度戻ります。そしてこの次も今回とはまた違っている事もわかっています。

慈照・ワーナー

現在、カリフォルニア州サバストポール市のストーン・クリーク禅堂主管。ミルウォーキー禅センターの秋山洞禪師について得度、片桐大忍老師の御指導のもと、ミネソタ禅メディテーションセンターで修行、さらに青山俊董老師の御指導のもと、愛知県名古屋市の愛知専門尼僧堂でも修行する。

国際安居に参加して

好人庵禅堂徒弟
妙修・レン

九州・聖護寺での国際安居に私を送って下さった、師匠である秋葉玄吾老師に感謝申し上げなければなりません。聖護寺は650年の歴史があり、その修行は道元禅師にまでさかのぼります。私にとって、僧堂に安居する事、日本へ行くことは初めてのことでありました。

まさに私は初心者であったのです。僧堂での生活が、日本の生活がどのようなものであるのか、全く想像もつきませんでした。私にわかっていたのは、道元禅師の古式に則った修行であり、それはとても厳しいものであろうということでした。私の家での責任ということもあり、そんなに長く行くということは、気乗りはしませんでした。日常生活から抜け出るといことは非常に難しく、1年間かけて調整をし、その時が来たときには病気になってしまいました。これは、私の初めての正しい方法による僧堂生活となるものでした。そこは非常に厳しいスケジュールで、電気はなく、托鉢とお盆がありました。

私達は少人数であったので、ローテーションはとても早くみんなを疲れさせました。9人の僧侶が参加し、内訳は日本人4人、イタリア人1人、ブラジル人2人、アメリカ人2名でした。言葉の壁は私が想像したよりも遥かに厚かったのです。そこは湿度が非常に高く、たくさんの蚊であまり眠れませんでした。いくつかの法要、鼓、版、鐘は私には新しいことでした。教育係の人が時々ジェスチャーをしながらやって来たので、その公務の細かいところを抜かしてしまっただろうと思いました。公務は3日間与えられました。1日目はその公務で彼らが何と言っているのか、見て理解するようにする。2日目は先生が見ているところで、その公務を自分で行う、そして3日目には一人で行うのでした。あなたが彼らが何を言っているのか理解していないのに、すでに責任はあなたにある、そういう時は本当に落胆させられます。私が何をしなければならぬのか理解するまでに、7週間かかりました。私達の安居は10週間でした。言葉やコミュニケーションがもう少し難しくなければ、私達はもっと学ぶことができ、公務もスムーズにできたことでしょう。私たちはついにぴったりと公務が出来るようにまでなりました。私たちはひとつになり、勉強、読経、作務、そして同じものを同じ時に食べる、私たちの自我を壊すグループとなりました。

安居全体を振り返ってみると、托鉢とお盆がとても貴重な体験だったと感じました。この2つの行持を、私はアメリカでは行えないでしょう。私は他の8人の修行僧と一緒に

でした。私達は大衣と着物をたくし上げ、網代笠をかぶり、手っ甲、脚絆を身につけ托鉢を行いました。非常に暑くじめじめした日で、私はわらじのせいで、かかとと足首の間にまめが出来てしまいました。私達は家から家へ、店から店へと“観世音、南無佛、与佛有因、与佛有缘、佛法僧縁、常楽我浄、朝念観世音、暮念観世音、念念従心起、念念不離心”と唱えながら歩き続けました。托鉢一食べ物乞う昔ながらの方法一は、私にとってとても信じられない思い出で、決して忘れることはないでしょう。私は長年の努力の経験による本物の経験を楽しみ、托鉢を行じたことによってどれだけのものを得られたか、どれだけ他と分け合うことを感じ取れたか。お盆は、私達は山の麓の村へ行き、家に入り、仏壇の前で先立った人々の霊のために祈りました。すべての家が、人が居ても居なくても鍵がかかっておらず、仏壇は御先祖様のために用意がされていた。御先祖様の写真があり、家族の人が先祖のことを話してくれました。私は細かいことまではわかりませんが、彼らの愛を感じることができました。私達は3つのお経を読み(10~20分)、その後家族の方が供養をしてくれました。私は地域の関わりというものが、すっかり完全に開かれていることに驚かされました。アメリカにはこのことと比較するものはありません。私は家族の人たちから感じた素晴らしい暖かさを決して忘れることはないでしょう。

私は僧堂生活に対する新しい理解と、深い尊敬とその多くの価値を持って帰りました。私は好人庵で私の公務をさらによい法要と始めています。そして私が学んだことをサンガの人々と分け合っています。

合掌

妙修・レン師は坐禅修行を、1976年オハイオ州・ケント市で彼女が最初にとった拳法のクラスで行い始めた。彼女の一心流空手のクラスではいつでも始めと終わりに10分間の坐禅を行っている。すべての禅の教えが紹介され、公案について論じ学ぶこともクラスの一部分となっている。1989年、妙修はオークランドに移り空手教室を新しく開いた。秋葉玄吾老師の下で在家得度を受け、その後弟子となった。一心流空手6段、拳法を通し禅を子供や大人に教えている。

◇◇◇◇◇◇

私の『坐禅参究帖』(3)

マサチューセッツ州ヴァレー禅堂
藤田一照

《断想 10》「払拭の手段・修行の脚頭」

「普勧坐禅儀」に「全体はるかに塵埃を出でたり、たれか払拭の手段を信ぜん。大都当処をはなれず、あに修行の脚頭を用いんや」とある。私には、この文が坐禅と「止・観」行とを区別する標準を明確に示しているように思われる。

いま仮に、この部分を現代語に訳してみると、「坐禅は、個人的行ではなく、宇宙一杯の行（全体）であるから、ちりやほこり（煩惱・妄想）をはるかに超出している。（浄・不浄といった相対的区切りなどはるかに超えたところに坐っているから）だからそれを払ったり清めたりするための段階的方法に頼る必要はない。万徳円満の住処（大都）である坐禅は、その時その場でそのままで事足りている。だから、あらためて小細工を弄して修繕することはないし、どこか外へ向って尋ね歩く必要もない。」ということになるだろうか。

つまり、坐禅の立場からすると、普通に仏教でいわれる「止・観」行は、「払拭の手段・修行の脚頭」ということになり、それを「信・用」してはならないといわれるのだ。

《断想 9》の始めに書いた瞑想の定義を分析してみると、そこには三つのエレメントがあることに気づく。それは、(一) 自分にとって望ましくないと評価されている現在の自分の状態、(二) 自分にとって望ましいと考えられる未来の状態（目的・目標）、(三) (一) から (二) へと移行するための瞑想行（手段）、の三つである。

こういう構成をもった瞑想法の例としては、貪りのころをなおすための不浄観（外界の不浄な様相を観じる）、怒りを静めるための慈悲観（一切衆生を観じて慈悲のころを起す）、愚かなころをなおす因縁観（諸事象が因縁によって生ずるといふ道理を観ずる）、物には実体があるという誤った見解を正す界分別観（五蘊・十八界などを観じる）、乱れたころを治める数息観（呼吸の数を数える）（中村元著『仏教語大辞典』の『五停心観（ごじょうしんかん）による』など枚举にいとまがない。

「払拭の手段」という句は『六祖壇経』にある神秀上座の「身はこれ菩提樹、心は明鏡台の如し。時時にねんごろに払拭せよ、塵埃をしてあらしむることなかれ。」という詩に由来している。伝統的な「止観」の立場に立ってこの詩を書いた神秀上座は、五祖弘忍からなぜかうけがわれなかった。かえって、それとは全く次元の異なる「菩提もと樹なし、明鏡また台にあらず。本来無一物、いづれのところにか塵埃あらん。」という詩をつくった米つき人の慮行者恵能が、衣鉢をついで達磨大師から六代目の祖師となったとされている。

「うっかりすると、自分のころのなかに、塵やほこりがたまってくる。それでは、いけないから、ある方法を使って

いつもそれを掃除して、きれいにしておこう。」これは非常にわかりやすく、納得のいく話だ。しかし、それでは達磨大師から正伝された坐禅にはならないというのだ。いったい、どこに問題があるのだろうか。

いろいろな角度からそれを参究することができると思うが、ここでは一つだけ指摘するにとどめる。それは、そこに個人の行為・造作があるかどうか、つまり「有為（つくりごと）」の行かどうかということだ。それは、煎じ詰めれば「こうすればこうなる」という計算にもとづいて、自分の望む状態をなんとかしてつくりあげようとする努力に他ならない。だから、どんなに高尚なことであれ、結局は、自分に都合の良い方向に物事を持っていこうという「我のはからい」がどうしようもなくまとわりついている。それを「染汚（ぜんな）」と言う。こういう染汚の行はどこまでも「個人技（こじんわざ）」、「自力行」であり、自己中心的な分別に基づく「趣向（一）から（三）へと趣き向かいたいという思い」や「取捨（（三）は良いが（一）は悪いという取ったり捨てたりを選択）」にころを煩わせることになる。たとえいかにそれが洗練された観念観法であっても、純粹無垢で混じり気のない坐禅にとって、それはメイメイ持ちの何かをもとめる「内職」にすぎないのだ。（沢木興道老師いわく、「メイメイ持ちの自分だけがサトリを得、安心を得たいと考えておる。貴様一人のために仏法はあるんじゃないぞ。」）

「仏祖の護持しきたれる修証あり、いわゆる不染汚なり。」（『正法眼蔵』洗淨）とはっきり言い切る道元禅師においては、いかに熱心に修行しようと、染汚の行である限りそれは仏法の修行とは呼べないのだ。私は、坐禅といわゆる瞑想との決定的違いの一つはここにあると考える。だから坐禅を坐禅として正確に行ずるためには、「諸仏の護念したもうところの不染汚」とはいったいどういうありかたなのかを深く、審細に参究する必要がある。

『正法眼蔵』唯仏与仏の巻に、「不染汚とは、趣向なく、取捨なからんとしいていとなみ、趣向にあらざらんところを、つくりするにはあらぬなり。いかにも趣向せられず、取捨せられぬ、不染汚。」とあるのが参考になる。不染汚とは、趣向もなく、取捨もないところを「強いて」つくり、でっぴあげようとする有為の営みの成果ではありえないということだ。不染汚は、それを目標にかかげて、それを目指して一心不乱に坐禅して、その結果として獲得できるような代物ではない。こういう趣向・取捨そのものの営みが全く無効のところ、こちらの「つもり」や「たくらみ」、「もがき」が全く通用しないところ、つまりただ（只管）のところに「正身端坐」するしかない。この態度を、道元禅師は「ただわが身をも心をもはなちわすれて、ほとけのいへになげいれて、ほとけのかたよりおこなはれて、これにしたがいもてゆく」（『正法眼蔵』生死）と表現している。その時、「当人の知覚に昏（こん）ぜざる（本人の意識・知覚にいらぬ）」（『弁道話』）ままた、「ちからをもいれず、ころをもついやさずして、生死をはなれ、仏となる。」というのだ。

こんな不可思議なありかたをしている坐禅を、常識的にわかりやすい趣向や取捨の文脈でとらえようとするのは、どだい無理な話で、その文脈内にある瞑想と同列に論じられるものではないことを、はっきり知っておかなければならない。道元禅師も「坐禅は三界の法にあらず、仏祖の法なり」とはっきり宣言しているではないか。

《断想 11》 ヴィパッサナー行と坐禅

先月号で、「止観行」とか「只管打坐の系譜学」とかをめぐり断想を書いたが、実はその原稿を送った直後に、相模原市の波多野豊道さんという方から『道元禅師における修行道の具体的実践方法 - “只管打坐” を南伝止観の伝統を受け継ぐものと解釈しての試論〔1〕 -』（曹洞宗研究員研究紀要第27号）という論文が届いた。

副題が示すように、まさに「只管打坐の系譜学」にかかわるテーマを扱っている論考で、「ユングの言ったシンクロニティ（同時性）かな。」とそのタイミングの良さに驚かされた。二月号の参究帖（1）を読まれて、何かの参考になればと送って下さったのだ。只管打坐の内実を明確にするために、その系譜をさぐるという問題意識を共有している人がほかにもいるのを知ったことは、私には大いに励ましになった。この場を借りて、心より感謝いたします。

手元にたいした文献資料もなく、また仏教学の学問的訓練を積んだ研究者でもない私の断想は、一坐禅修行者の私見というべきものでしかないことを、ここであらためてお断りしておきたいと思う。

さて、豊道さんは、「静慮 samadhi だけの伝統禅には限界があり、無常を見極める観察 vipassana 行がどうしてもつくわえられなければならない。それが非思量であり只管打坐である。」として、只管打坐を南伝仏教のヴィパッサナー実践につなげようとしてされている。そのことによって従来、曖昧・観念的・抽象的なままにされてきた只管打坐の具体的姿を明確にできるのではないかと考えておられる。今後はヴィパッサナー実践の基本テキストである『大念処（四念処）経』（マハーサティパターナスutta）に基づいて、この方向でさらに研究を進めるといふ趣旨の手紙が添えられていた。その成果を楽しみにしている。

私もヴィパッサナー行の十日間コースに参加したり（近くに大きなセンターがある）、『大念処経』の注釈書を読んだりしてきた。その限りでは、これまで書いてきたように、それと坐禅とでは、価値的な優劣の問題ではなく、行の内容及び背景にある立場・思想の点で異なっていると言わざるをえないというのが私の結論である。だから、豊道さんと私は見解

を異にする。

これまで書いてきたこととも重なるが、私の坐禅参究メモの中から、彼との議論の材料になりそうな項目をいくつかひろって、手短かにまとめてみよう。

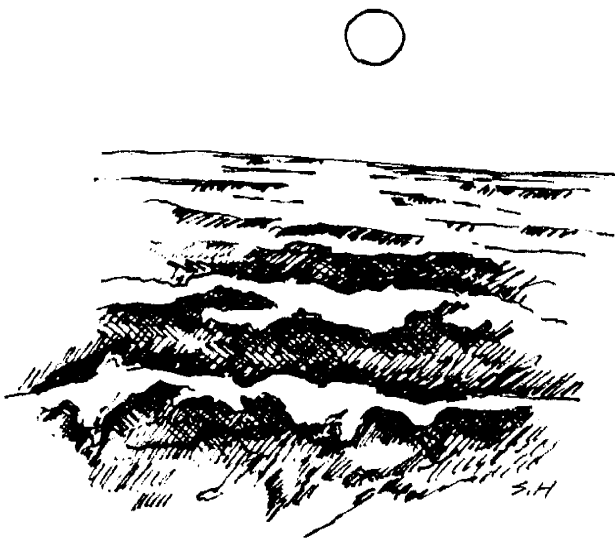
（一）坐禅は観法ではなく、あくまでも「正身端坐」である。もちろん、そこではからだだけでなく、こころも同時に正身端坐に関っているのであり（そうでなければ成り立たないのが正身端坐というものだ）、「坐禅の時は坐禅の心身」となっている。その時、こころは特定の観法にたずさわっているのではないが、ある独特のありかた・働きをしている。そこだけを取り出せば、如実観察（ヴィパッサナー行）をしているように見える要素が確かにあるといえなくもないが、それはあくまでも坐禅の一部分であって、全体ではない。（坐禅の時のこころのありかたというのは、重大な問題で今後、何度も触れていくことになるだろう。）

豊道さんは論文の中で「ヴィパッサナー実践」の具体的なやりかたを述べている。それは呼吸にあわせてお腹がふくら

んだり、へっこんだりするのを、「フクラム、ヘコム」とこころのなかでいう（ラベリング）ことをとどえることなく続けることを土台にしながら、刻々と生起するできごとを一つ一つラベリングしていくのだ。「カユイ」、「ダルイ」、「ネムイ」、「キコエル」、「ミエル」・・・

私が参加したヴィパッサナー実践の十日間コースでは、最初の三日間は鼻周辺部の感覚に注意を集中し、身体感覚に対する感受性を訓練し（アナバーナサティとよばれる行）、残りの七日間はそこで磨いた体感感受力をサーチライトのように頭部から足、足から頭部へと走査（スキャンニング）して、からだの内部状態を観察し続けるというものだった。

ラベリングの手法にしても、スキャンニングの手法にしても、「意識」のする仕事であり、その営みが実践の眼目・中心になっている。だから一応「背筋はまっすぐに」という指示はあったが、それはこの仕事をするのに便利で都合の良い恰好だから言うだけのことであって、ある程度長い時間にわたって、体を動かさないうえに上記のような観法が継続できるようなら、それ以上は姿勢については、坐禅のように細かいことをうるさく言わない。自分の経験からいって、こころがその仕事をするのに忙しくて（？）、坐相を守るのが難しかった。こころを意識的に使うと、どうしてもからだのどこかに微妙なりキミが入ってしまうのだ。もっともそれに慣れてくればまた違ってくるのかもしれないが。



この十日間コースでは、足腰の痛みなど肉体的にはどうということはないが、普段の坐禅ではやらないところの「使い方」をしたせいか、(普段使わない筋肉を過度に使うと筋肉痛を起こすように)、精神的な疲れ方が坐禅の接心のそれとはだいぶ違っていると感じた。また、悩が変に(?) 刺激されたのか、寝ると面白い夢がいろいろ盛んに現れてきたりした。ヴィパッサナー行と坐禅とは違う営みではないかという私の考えは、実は、理論的なこと以前に、こういったからだで感じた「味」の違いからきているのである。

(二) 坐禅は、特定の目的をめざして「私」が意識的・能動的にある心理操作の技術・方法を実践することではない。そういう「趣向・取捨という染汚」(《断想10》参照)の入る余地がないものでなくてはならない。内山興正老師は、「正しい坐禅をするとは、この正しい坐禅の姿勢にすべてをまかせきってゆくことです。」(『生命の実物—坐禅の実際』 柏樹社刊)とはっきり述べておられる。つまり自分が出張っていった何かをことさらにやらかすのではなく、そういう人間的欲望に基づく有為(つくりごとなし)の営みを一切棚上げにして、坐禅という不為(つくりごとなし)の姿勢(「坐はすなわち不為なり」『正法眼蔵随聞記』坐禅では人間的な営みは一切行われぬ。だから仏行といわれる。)に打ち任せてしまい、自己は坐禅に修証される自己として、そこに「ただかくのごとく(如是)」あるのみとなる。

『正法眼蔵』現成公案にある「自己をはこびて方法を修証するを迷いとす、方法すすみて自己を修証するはさとりなり。」という言葉がこの辺の消息の表現として受け取ることのできるだろう。

ラベリングにしろスキニングにしろ、「自意識=私」のする特別の「能動」的努力という色合いが濃いように思う。文法用語を借りれば、「他動詞的ありかた(主語が目的語に対してなにかをすることという構造)」だ。一方、坐禅においては、意識ははっきり覚めて坐禅の全体(尽有尽界)を見守って(比喩的表現)いるけれども、そこからなにかをことさらに取り上げて特別に注意を向けたり、組織的観察ということさらな作業をしたりはしない。いま、ここで、聞こえるまま、見えるまま、体が感じるまま、思いが浮かぶまま、……かくのごとくあるままに「全体が全体をしている。」その意味で「自動詞的ありかた(目的語をとらず、主語自身のはたらきを示す構造)」と言えるだろう。「自受用三昧」とか沢木老師の言われた「自分が自分する」というのはそのことを指しているのだろう。つまり、坐禅はdoingではなくbeingなのだ。

ただし、ヴィパッサナーの修行が究極にまで深まってくると、能所、主客の分裂が無くなって一如の状態となり、意識的努力の感覚も脱落して、ある面では坐禅と共通の質を持つようになるのかもしれないという可能性も考えられる。しかし「正身端坐」を通さないで、「こころ」の訓練だけでそれが可能かどうかということについては、私には今のところ、

なんとも言えない。

(三) 実は、最近ヴィパッサナーの修行者グループの前で話をしたとき、話のなりゆきで「もしかしたらあなたたちのヴィパッサナー行が練れに練れて、極まるころまで来たら、そしてそこでさらに、『百尺竿頭進一步』することができたら、只管打坐が深まっていったのと同じところででいくのかもしれない。だから、中途半端なところで満足しないで、どうぞ自分の修行をどこまでも深めていってください。」というような生意気なことを、つい口走ってしまった。私も、ヴィパッサナー行と只管打坐は全くの無関係というわけではなく、なんらかの関係があるだろうと感じている。しかし単純に連続しているのではなく、その間には『百尺竿頭進一步』というような質的飛躍(ヴィパッサナー行がそれ自身を脱体的に乗り越える)があるはずだと思う。そこをどう見るか。

(四) 浄土教の伝統は日本に入って、法然一親鸞によって根本的に変革され、まったく新しい意味合い(いわれ)を持つ念仏が生まれた。この出来事は仏教に関わる者にとって、この上なく重大な意味を持っていると私はつねづね考えているのだが、それと「同型」の変革が、聖道門的瞑想の伝統においても展開したのではなかろうか、それが「止観から坐禅へ」ではないかというのが今の私の予想としてある。

「雑行を捨てて本願に帰」したところから出てくる「大行」としての念仏。それは従来のような、こちらから向こう(浄土)へ行く未来往生のための念仏ではなく、今ここで、すでに向こうが足を運んで我々のところまで来ていることの証(あかし)としての念仏である。現生不退、摂取不捨という信心の利益(りやく)は、信心を積み上げたあげくの結果、つまり信心とひきかえにあとから出てくるのではなく、信心そのものの中にある。それだからこそ、『ただ』念仏のみ」というところに安住できるのだ。坐禅にもこれと同じような構造があって、坐禅は坐禅のみで自己完結・自律していて、未来を持たず、現在安住している。坐禅の利益は坐禅そのものの中にある。だから「只管」に打坐できるのだ。「証上の修」修行して後に悟るのではなく、修することがすでに悟りの上での修行になっている。ヴィパッサナー行においてもこのようなことが言われうるだろうか。

今回は、とりあえず、この四つを論点としてとりあげるにとどめる。坐禅の独自性を浮き彫りにするのに、ヴィパッサナー行との対比はとても役立つと思っているので、この問題は今後も引き続き参究していくつもりだ。

◇◇◇◇◇

開教ニュース

* 本年7月、北アメリカ開教センターは、カリフォルニア州サンフランシスコ市の桑港寺に移転することになりました。7月末日までには移転が完了するよう準備を進めております。移転後の住所は、以下のとおりです。

Soto Zen Education Center
1691 Laguna Street
San Francisco, CA 94115

* 3月7日、前北アメリカ開教総監山下顕光老師の一周忌が、両大本山別院禅宗寺にて、大本山永平寺監院南沢道人老師の正当法要導師により厳粛に修行されました。

* 3月9日、スタンフォード大学にて道元禅師シンポジウムの第3回現地準備委員会が行われ、日本からは、大本山永平寺監院南沢道人老師、大本山総持寺前監院江川辰三老師、遠忌局国際班の松永然道老師、福島伸悦師らが参加されました。

北アメリカ開教センター行持日程 1999年5月～12月

【 宗典講読会 】

日時：5/16, 6/6, 7/18, 8/1, 9/12, 10/10, 11/28, 12/12

会場：サンフランシスコ桑港寺

内容：午前8:30 坐禅、9:10 朝課、9:30 作務、10:00 奥村正博開教センター所長による
正法眼蔵仏性の巻提唱

【 仏教講演会 】

日時：5/7, 6/4, 8/6

会場：サンフランシスコ桑港寺

内容：午後6:30 坐禅、7:10 秋葉玄吾開教総監による提唱『以水為命、以空為命』

日時：7/9

場所：サンフランシスコ桑港寺

内容：午前10:00 桑港寺御盆法要 11:00 南原一貴師による法話

日時：9/10, 10/1, 11/5, 12/3

場所：サンフランシスコ桑港寺

内容：午後6:30 坐禅、7:10 太源レイトン師による法華経の提唱

【 接心（曹洞禅サンガの集い） 】

日時：6月11日-18日

会場：ミネソタ州宝鏡寺

日時：12月1日-7日

会場：ウイスコンシン州ミルウォーキー禅センター